

偶感 (西郷南洲)

幾たびか 辛酸を 歴て 志 始めて 堅し

丈夫 玉碎するも 甄全を 恥ず

我が家の 遺法 一人 知るや 否や

見孫の 為に 美田を 買わず

幾歴辛酸志始堅 丈夫玉碎恥甄全  
我家遺法人知否 不爲兒孫買美田

解説 明治二年の論功行賞の際、正三位を与えられたが、維新の大業の完成は、これからであり、安逸をむさぼり、禄を私すべきではないとして固辞し、その所懐を述べた詩。

語釈 ※辛酸Ⅱからいのと、すいのと。艱難苦勞。

※玉碎Ⅱ玉のようにくだける。りっぱな死に方をいう。

※甄全Ⅱ瓦となつて安全に生き残ること。何もしないで生きながらえること。※美田Ⅱりっぱな田畑。転じて、豊かな財産のこと。

通釈 いくたびか辛苦難難を経験して志が初めて堅くなり、不屈の精神が養われるのである。男子としては、玉となつて碎けるとも、瓦となつて生命を全うすることを恥辱とするものである。わが家には先祖から伝わった、子孫の守るべきおきてがある。それは子孫のために田畑など財産を残し、安楽に世を送らせるようなことは絶対にしないとの主義である。